目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　提案内容 …… 1

Ⅲ　研究の実際（提案内容に関する事例）

1　スクールカウンセラーとの連携 …… 1
・利用状況
・事　例

2　巡回相談での連携 …… 7
・利用状況
・事　例

3　外部機関を利用したことの成果と課題 …… 12

Ⅳ　今後に向けて …… 12

特別支援教育における外部機関との連携

提案者　栃教協教研推進委員会特別支援教育部
日光市立大沢中学校教諭　星　　貴　志

Ⅰ　はじめに

教育現場において、現在、スクールカウンセラーや巡回相談の利用など、多くの外部機関との連携が行われている。しかし、発達障害のある児童・生徒の支援のために、どのような連携が有効なのか模索している段階である。

そこで、特別支援教育における「外部機関との連携」について、様々な事例を検証し、今後の教育現場に役立てたいと考え、提案する。

Ⅱ　提案内容

1　スクールカウンセラーとの連携
- 利用状況
- 事　例

2　巡回相談での連携
- 利用状況
- 事　例

3　外部機関を利用したことの成果と課題

Ⅲ　研究の実際（提案内容に関する事例）

1　スクールカウンセラーとの連携

事例１

⑴　利用状況

①　日数・回数
- 要請により不定期
- 市教委、カウンセラーと連絡して調整

②　内　容
- 対象：児童、教職員、保護者
- 授業の観察
- ＷＩＳＣの実施
- 児童のカウンセリング（作業療法や箱庭療法を含む）
- 職員へのアドバイス
- ケース会議でのアドバイス

⑵　事例：小３男子（通常学級）

①　特　徴

・ＡＤＨＤ、広汎性発達障害

・１年生の時からちょっとしたことで友達に手が出たり、イライラして暴言を吐いたりしていた。イライラしているときは先生の話を聞くことができず、クールダウンさせてから指導していた。落ち着いてから話をすると、自分自身を責め、自傷行為を引き起こすこともあった。

・学校での様子を保護者に伝えると、母親が本児を折檻してしまう。

②　対　応

・本人のカウンセリングと母親への支援のために、スクールカウンセラーの利用を勧めた。

・７月に学級での様子をスクールカウンセラーに見てもらい、本人と面談、ＷＩＳＣ－Ⅲを実施した。

・気分転換やクールダウンのために特別支援学級内に活動スペースを設け、段ボールハウスを作り、工作ができるようにした。

・母親との面談を複数回実施した。

・本児の特性について共通理解を図った。

・母親に本児の特性について知らせ、対応の仕方を伝えた。

・医療機関の受診や特別支援学級の利用につなげた。

・２年生になっても観察や母親の面談を継続した。

③　変　容

・３年生になって、週１時間、校内の自閉症・情緒障害特別支援学級に通級している。

・イライラしても我慢して、他の児童に暴力を振るうことはなくなった。

・大声で怒鳴ったり、繰り返し文句を言ったりすることも減ってきた。

・物に当たることはまだよくあるが、自傷行為は少なくなった。

・クールダウンの時間が短くなり、授業時間内に教室に戻れることが多くなった。

事例２

⑴　利用状況

①　日数・回数

・年６回半日単位（５月、７月、９月、12月、２月）

②　内　容

・対象：児童・保護者

⑵　事例：小４男子（通常学級）

①　特　徴

・一日を通し学級にいられる時間が少なく、特別支援学級で過ごすことが多い。

・通常学級では学習に集中できないことがほとんどである。

・工作などが得意で、手伝い等が比較的好きである。

② 対　応

・全体での指導については具体物を用意し、体験と結び付けて学習できるような場を無理なく設定していく。
・視覚に訴えた資料等を用意し説明をしていく。
・一日の流れ（計画）の提示をする。
・幼少期から多動傾向にあり、十分な愛情を受けて成長していないため、愛着のやり直しを行う。
・集中して取り組む練習をさせる。（時間は短めに、状態がよく達成できても、約束の時間を延ばさない）
・好きなことや得意なことから10分程度の時間で取り組ませる。
・管理職、担任、特別支援学級担任、母親と本児の現状についての理解及び今後の方向性について話合いを数回もつ。
・愛着のやり直しという観点から、児童への接し方について職員と共通理解を図る。

③ 変　容

・支援員の傍らで、徐々に落ち着いて過ごすことが出来るようになった。スケジュールに沿った１日を過ごさせることは難しいが、指示が入りやすくなってきた。
・支援員がいなくても一人で教室にいられるようになってきた。

事例３

⑴ 利用状況

① 日数・回数

・年間35回　毎週１回来校
・11時30分から16時30分まで

② 内　容

・対象：児童・保護者
・授業の観察
・観察の結果報告から、今後の対応を検討

⑵ 事例：小５男子（通常学級）

① 特　徴

・授業中じっとしていられず、動き回る。
・集中して取り組むことが苦手である。
・周りの行動に同調して、ふざけることが多い。
・学力が低い。
・感情の起伏が激しく、いじけることが多い。
・みんなが笑っていると本児もうれしくなる。
・手伝いなどを進んで行う。

② 対　応

・授業中に自分の得意なことを中心に取り組ませる。
・授業に集中するために、本児が授業で注目される場面を作る。
・授業中、動き回ることができる展開を考える。
・家庭での様子を聞き、気持ちが安定するように声をかける。
・注目を引くためか、自分勝手な行動をとるが、このことに対してはあえて声をかけず、本児が落ち着くのを待つ。

③ 変　容

・授業中、何をするかをはっきりさせることによって、以前よりじっとしていることが増えてきた。
・学習に集中する時間が短く話をじっと聞くことが難しいが、授業中、動き回って考える活動などを増やすことによって、じっと椅子に座っていなくてもよいので、気持ちが安定してきた。
・声をかけることで、安心感が高まったのか、イライラすることが減った。

事例４

⑴ 利用状況

① 日数・回数

・年間13日分（午前中のみを0.5日と換算して）
・中学校を拠点校とするＳＣが１回

② 内　容

・対象：児童・保護者・教職員
・指導上問題のある（発達障害の疑いがある、トラブルが多い等）児童について、教職員からの要請に対して授業中の観察や家庭訪問
・ＷＩＳＣ－Ⅳの実施
・保護者への医療機関紹介
・年間13日分のＳＣは市費、中学校拠点のＳＣは県費

⑵ 事例：小５男子（通常学級）

① 特　徴

・服薬をしていなかった低学年の頃は、友達に対する暴言、暴力が毎日のように発生していた。
・広汎性発達障害との医師の診断を受けている。薬を常用し薬が効いているときは気持ちが沈み、効いていないときは高揚している。
・友達とのコミュニケーションが苦手で、集団での行動を嫌がり、気分が悪いと言って教室にこもっていたり、保健室に行ったりすることがある。
・被害者意識が強く、原因を自分が作っているようなときでも、相手だけを悪く言い、自分の言動については反省しない。
・保護者は本児へのトラブルに対する、学校側の指導等に対して不満があり、批

判的である。

② 対　応

・「上級生にも、同級生にも、下級生にもいじめられている。」「特別支援学級に入級させる気はない。社会に出てちゃんとやれるように育てたい。自立させたいが、特別支援学級ではコミュニケーションがとれなくなる。」「医師は、入級した方がよいが無理をしなくてもよいという意見だ。教育支援委員会にかけることも学校から言われたら断る。」「生活全般で面倒がる。怒られないとできない子になっている。」というような保護者の特別支援学級への入級に対する強い拒否や学校に対する強い不満があるため、それに対して何か返してもさらに強く拒否されるので、教職員も受容的に聞くようにする。

・学級での全体的な指示の後、本児に対しては個別に指示をする。

・拒否反応を示したときには無理にやらせないで様子を見る。

③ 変　容

・保護者は、教職員に話せないこともＳＣには話せており、ＳＣとの相談により、考えが少しずつ変わってきた。５年の終わり頃、保護者から、ＳＣを通さずに、中学校に行ったら特別支援学級への入級を考えている旨の話が出るようになった。

事例５

⑴ 利用状況

① 日数・回数

・年間48日（５～３月）７時間45分（毎週木曜日）

② 内　容

・対象：生徒・保護者、学区内の小学校の児童・保護者

・相談室において、１人１時間程度の面談

・必要に応じて、ＷＩＳＣ－Ⅳの検査

・校内の委員会（不適応対策委員会・教育支援委員会）に参加

・費用　　県費（36日分）市費（12日分）

⑵ 事例：中１男子（通常学級）

① 特　徴

・知識理解の面では特に問題はないが、作文や自分の考えをまとめる活動が苦手である。

・コミュニケーションが苦手である。

・女性教師との距離感をつかむことが苦手である。

・自分の決められた行動パターンがあり、変えられない。

・保護者は個性ととらえているので、医療機関を受診することも、特別支援学級に入級することも考えていない。

② 対　応

・保護者の了承を得て、ＷＩＳＣ－Ⅳを実施する。

・伝えるべき内容は簡単な言葉で短く伝える。
・集団でのルールが曖昧なことに対して、判断を任せるような伝え方は混乱するため、決まり事ははっきり伝えたり、枠を与えたりする。
・行動があまりにも不自然なときは、見本を見せたり、一緒にやったりして学ばせる。
・他者の感情や場の雰囲気を読むことが苦手なので、戸惑っている場面では簡単な言葉で状況を説明する。
・集団の中でこの生徒の優れた面が生かされる場面があると、自信を失うことなく生活できるので、本人の得意な面を生かせる係などの仕事を与える。
・係活動などちょっとしたことでもきちんと取り組めたことは、おおげさに賞賛する。
・女性教師との距離感については、腕を伸ばした長さだけ離れるように、その都度具体的に指導する。

③　変　容

・短い文章ではあるが、１日の感想や行事への意欲などをノートに記入するようになった。
・女性教師との距離感をつかめるようになってきた。
・級友も本人の行動に過剰に反応しなくなり、からかうことも減ってきた。

事例６

⑴　利用状況

①　日数・回数

・週１日訪問（毎週金曜日）

②　内　容

・対象：生徒・保護者（校内特別支援委員会での検討を含む）
・面談日時の設定と面談後の担任との連携
・小中一貫教育で小学校と連携し、訪問相談を実施
・校内特別支援委員会での助言（主に、発達障害傾向の生徒や不登校生徒への対策、並びに支援方針の検討）
・心の教室において、心の教室相談員とタイアップして支援

⑵　事例：中１男子（通常学級：発達障害傾向の生徒）

①　特　徴

・１年生夏休み後から欠席が多くなった。
・１年の１月ごろからほぼ学校に来られない状態になった。

②　対　応

・ＳＣにつなぎ、母と面談したり、ＳＣの家庭訪問による本人との面談を行ったりした。
・部活動には、時々参加できていたので、部活動参加からの登校復帰を目指した。
・ＳＣを中心とする学年や学級担任からの支援体制を確立していった。

③　変　容

・２年生の１月ごろから心の教室への登校が徐々にできるようになった。

・３年進級時より、登校できるようになった。

事例７

⑴　利用状況

①　日数・回数

・毎週火曜日来校

②　内　容

・対象：生徒・保護者・教職員

・県の緊急処置プログラムによる派遣

⑵　事例：中２男子（自閉症・情緒障害学級）

①　特　徴

・１年の５月より、交流授業が嫌で、朝登校を渋るようになる。６月に特別支援学級担任が指導した。そのことが納得できないこと、口調が怖かったことにより、朝になると腹痛を起こし、不登校気味になる。

・保護者面接を実施し、学校に来ることを目標にした。まずは、好きな時間に登校し、好きな時間に帰るようにした。10時頃登校し、給食前に下校することを繰り返すことにより、遅刻はするが下校時間までいられるようになる。

・担任とはうまくいくようになったが、友達のことが嫌だと言い出す。

②　対　応

・ＳＣに本人の悩みを聞いてもらう。

・ＳＣにソーシャルスキルトレーニングを実施してもらう。

・ＳＣから母親にアドバイスをしてもらい、早めに障害についての告知をするように仕向ける。

・担任はできるだけ、本人が学校に来やすい雰囲気をつくる。

・嫌いな友達から、できるだけ遠ざける。

③　変　容

・母親一人で定期通院はしていること（年１回くらい）など、担任には話せない多くの情報をＳＣから得ることができた。

・登校時間が早くなり、学校にいる時間も長くなった。

・苦手な友達がいても、過ごせるようになってきた。

2　巡回相談での連携

事例１

⑴　利用状況

①　回　数

・年２回（6月、10月）

② 内　容

・対象：児童

・市教委より指導主事、臨床心理士１名、作新大学より教授など２名

⑵ 事例：小２男子（通常学級）

① 特　徴

・こだわりが強く、自分のペースで物事を進める。

・工作など物作りが好きで手先が器用。

・１年生の時より、砂場で遊ぶことが多く、教室にいられない。

② 対　応

ア 全体的な助言

・授業の構成を考えて、子供たちを意図的に動かす工夫をする。

・多くの児童が思考できるような発問をする。個々のつぶやきを拾わないで、近くの子と相談するなど考えさせる方法をとる。

・多くの児童が見通しがもてるように、スケジュールを提示する。

イ 個別的配慮についての助言

・目の前にミニボードを提示するなど、今やることを明確にする。

・できそうな課題の時に、要所要所で声をかけていく。

・現段階では、いすに座ることが目標でもよいので、できているときにフィードバックをする。

・一つの活動を短くすることで、もう一度参加できるチャンスとする。

ウ 対　応

・学級全体にする配慮と個別にする配慮を意識し、担任と支援員が、同じ方向で受け止めたり促したりしてきた。

・医療機関との連携を図り、情報の共有により、服薬を見直した。

③ 変　容

・家庭での生活を、コントロールしていった。

・砂場から、教室の隣のスペースに座っていることができるようになり、さらに教室で座っていることが増えた。本人なりに、授業に参加している。

事例２

⑴ 利用状況

①日数・回数

・年８回　10：00～16：30

② 内　容

・対象：児童・保護者・教職員

・教育相談員１名〔臨床心理士〕

・児童観察、行動や精神面に不安を感じる児童との面談（保護者要望）

・ＷＩＳＣ検査等の実施

・場所は学校や生涯学習館など保護者の要望により実施

⑵　事例：小４年男子（通常学級）

①　特　徴

・広汎性発達障害、こだわり、衝動性あり。
・対人は好きな児童としか関わろうとしない。好きなことしかやろうとしない。
・朝決まった時間に登校できない。
・嫌なことややりたくないことがあると、逃げ出してどこかへ行ってしまう。
・物を倒す、投げる、泣き叫ぶ等のパニックを起こすことが多い。
・学習支援員が、学級で一対一対応の支援。

②　対　応

・自己肯定感の低下が見られるので、本人が肯定感を得られるような言葉かけを心がける。
・社会性が積み上がるように特別支援学級への入級を勧める。
・学校での様子を家庭に伝える。
・医療機関と連携し、支援策を検討し、情報を共有する。

③　変　容

・５年より特別支援学級に入級した。
・保護者と担任での意識の共有を図り、生活習慣の改善に向け働きかけ（言葉かけ・電話・担任の迎え）をするようにしたところ、遅刻が大幅に少なくなった。
・パニックを起こすような兆候が見られた時、特別支援学級担任の言葉かけによって未然に防ぐことができるようになってきている。
・特別支援学級での学習が成立している様子を保護者が参観したことにより、安心感をもって、保護者が本人を褒めることが増えるなどよい循環ができつつある。

事例３

⑴　利用状況

①　日数・回数

・必要に応じて随時

②　内　容

・対象：児童・保護者
・臨床心理士
・療育機関への連絡調整、検査等

⑵　事例：小５男子（特別支援学級）

①　特　徴

・幼稚園在園時、ＡＤＨＤ・広汎性発達障害の診断を受ける。
・初めての事や場所には緊張し、参加を拒否する。参加させようとするとパニッ

クを起こす。

・気持ちを表現するのが苦手で、うまく気持ちが伝わらないと暴力や暴言が出てしまう。

・保護者は通常学級での交流を強く願っているが、本児の実態と合っていないため、不安定になっている。

② 対　応

・臨床心理士に学校での様子を観察してもらい、それについて保護者との面談を行う。

・個別の検査実施後、臨床心理士が保護者・学校に対して本児の得意なところと少し苦手なところを説明し、療育機関を紹介する。

・保護者が療育について福祉課に相談するために、担任や特別支援コーディネーターと面談をする。

・ゲーム等を通して、コミュニケーション力を育成するため、２か月に１度臨床心理士に学校に来てもらい療育開始する。

③ 変　容

・療育後は、臨床心理士と保護者、担任が本児の様子について療育機関から説明を受け、今後の対応（学校、家庭）について話し合うことができた。

・交流については、保護者も本児に合わせて無理のないようにと考えるようになり、結果、以前より落ち着いて生活できるようになった。

事例４

⑴ 利用状況

① 回　数

・年18回

② 内　容

・対象：児童・保護者・教職員

・個別の心理検査（ＷＩＳＣ－Ⅳ）等の実施

・指導内容、方法等についての助言

・校内体制の在り方についての助言

・校内研修会の講師　など

⑵ 事例：小６男子（自閉症・情緒障害学級）

① 特　徴

・３年生になって数日で、通常学級の教室に入れなくなる。

・送ってきた母親と離れることもできず、一日中母親と過ごす。

・何に対しても不安が大きい。

② 対　応

・３年生の５月に巡回相談事業を紹介し、臨床心理士と母親の面談を開始した。

・児童の観察、ＷＩＳＣ－Ⅳ検査、母親との面談を継続する。

・月１回程度のペースで臨床心理士が母親へのアドバイスをし、関わる職員に対しても対応の仕方をアドバイスしてもらう。
・困り感をもっている複数の保護者も含めて、ペアレントトレーニングを実施する。
・母子分離の状況を見て、特別支援学級で過ごすことも有効であることを伝えてもらう。
・臨床心理士の勧めで、外部機関でのプレイセラピーを開始する。

③　変　容

・３年生９月頃より少しずつ特別支援学級で、母親と離れて過ごせるようになる。
・４年生４月に、特別支援学級に入級し、母親が帰っても特別支援学級で過ごせるようになる。母親も子供への接し方を積極的に学ぼうとする。
・４年生２学期には、交流学級にも自分から行けるようになり学校行事にもすべて参加できるようになる。
・５年生になってからは、自力で登校できるようになりのびのびと過ごしている。

事例５

⑴　利用状況

①　日数・回数

・年12回

②　内　容

・対象：生徒
・市教委より臨床心理士１名、宇都宮大学より教授１名

⑵　事例：中２男子（自閉症・情緒障害学級）

①　特　徴

・アスペルガー症候群と診断されている。
・場の状況がとらえられず、自分のことばかり話してしまうことがある。
・時間の管理や、身のまわりの整頓が苦手である。

②　対　応

・母親が生徒をかまいすぎているので、見守るようにする。
・特別支援学級内では、特に配慮はしない。トラブルが起きた時は、自分の力で乗り越えられるようにする。
・場の状況がとらえられず、話しすぎてしまうときは、ルールを作って指導する。例えば「一度に話すのは三文まで」など。
・時間の管理については、家庭において母親などが「○分間○○の教科をやるよ」などといった形で訓練する。
・整理整頓については、袋などを用意し、「国語のものはこの袋に入れる」「鉛筆やボールペンなどはここにおく」など置く場所を明確にする。

③　変　容

・交流学級で生活する時、トラブルが起きても支援を受けながら乗り越えられる

ようになった。
・本人も自信がつき、交流学級の生徒から受け入れられるようになった。
・臨床心理士から「見守るように」との指示を受けたことで、母親が少しずつ距離を取って接するようになった。

3　外部機関を利用したことの成果と課題

〈成　果〉

・専門家の立場からの判断、アドバイスにより、児童生徒理解が進んだ。それにより、適切な対応の仕方を知り、指導・支援に生かすことができた。
・専門家の助言により、保護者の児童生徒に対する受け止め方が変容した。
・保護者が客観的理解を深めることで、子供の特性を受け止めることができ、保護者・児童生徒の心の安定につながった。
・継続的な連携により、系統立てた支援ができた。

〈課　題〉

・時間が限られているため、相談できる人数に制限があることや、一人一人に充分な時間を割くことができない。
・定期的な相談であっても間隔が長いことがあり、相談と相談の間が空いてしまう。

Ⅳ　今後に向けて

スクールカウンセラーや巡回相談の利用など、外部機関との連携をしていく中で、様々な事例を検証した。そこから、市町ごとにいろいろなシステムがあり、それぞれの学校が多様に手を尽くし外部機関との連携を図っていることがわかってきた。

それまで専門的な視点がなかったために、児童生徒の支援の方向をうまく決定できなかった。それがスクールカウンセラー等の専門家の助言によって、教員の指導・支援に生かすことや、保護者の変容につなげることができた。保護者が安定したことで、結果的に児童生徒の心の安定にもつながることがわかった。

外部機関との連携が有効であることがわかっているが、連携を望まない保護者もいるため、どのように相談を受け入れてもらえるかを考えていかなければならない。また、学校によっては相談日数が少ないために継続的な支援がしにくい状況を改善することが求められる。将来的な社会参加・自立に向けて、今をどう支援していくかという視点に立って継続的な連携を図っていくことが重要だと感じた。

目　　次

1　提案趣旨 …… 1

2　提案内容

⑴　研究の概要 …… 1

⑵　「特別支援『ナビ』」について …… 2

⑶　研究の実際 …… 2

⑷　佐野市サポートファイルについて …… 10

3　成果と今後の課題

⑴　成果 …… 10

⑵　今後の課題 …… 10

幼・保・小・中・高の連携を図った特別支援教育の推進
～「特別支援『ナビ』」の効果的な活用～

提案者　佐野市立石塚小学校　教諭
大　出　由美子
佐野市立栃本小学校　教諭
大　谷　道　代

１　提案趣旨

特別支援教育において、幼・保・小・中・高の連携が促進され、よりよい支援を確実につなぐことが重要になってきた。そのため佐野市では、通常学級における子ども一人一人に応じた支援と指導の充実と継続を図るために、幼稚園・保育園から高等学校までスムーズな支援の引継ぎができるように研究を進めてきた。そこで、幼稚園・保育園から小学校へよりよい支援を引き継いでいくための「入学支援シート」、小学校から中学校への支援が継続できるための「小中連携シート」、中学校から高等学校への引継ぎシートとして「中高連携シート」を作成してきた。そして、これらの連携シートを広く多くの教職員に知ってもらい、よく理解してもらえるように、活用の仕方を分かりやすく説明した「特別支援『ナビ』」という手引きや「特別支援『ナビ』の活用事例集」も作成した。

今回の提案では、「特別支援『ナビ』」と「特別支援『ナビ』の活用事例集」を紹介することから、支援の必要性の高い子どもたちが生き生きと学校生活が送れるように、通常の学級での特別支援の在り方について考えていきたい。

２　提案内容

⑴　研究の概要

・幼・保・小・中・高の教育支援の連携の必要性
・よりよい支援の継続の重要性
・つなぐ支援により、子どもたちが生き生きと活動

⇩

通常の学級における支援の必要性が高い子どもに対する支援の手立ての明確化

⇩

「特別支援『ナビ』」の作成

⇩

「特別支援『ナビ』の活用事例集」の作成

⑵ 「特別支援『ナビ』」について

① 「特別支援『ナビ』」について

＜幼・保・小・中・高の教育支援の連携＞

佐野市支援体制（乳幼児期から学齢期）
よりよい支援の継続
幼稚園・保育園の個別の指導計画の活用
入学支援シートの活用
小学校・中学校の個別の指導計画の活用
小中連携支援シートの活用
中高連携支援シートの活用

＜通常の学級における支援の必要性の高い子どもに対する支援の手立て＞

具体的な教育的支援の方法
気になる児童生徒の理解と支援の手立て
特別支援教育コーディネーター
校内支援体制について
巡回相談を活用しよう

② 「特別支援『ナビ』の実践事例集」について

入学支援シートの活用
小学校・中学校の個別の指導計画の活用
具体的な教育的支援の方法
気になる児童生徒の理解と支援の手立て
特別支援教育コーディネーター
校内支援体制について
『ナビ』Ｑ＆Ａ

⑶ 研究の実際

① 個別の指導計画の活用

＜学習面＞

	実　　態	指導目標	指導の手立て
学習面	【うまくいっているところ】 ○学校が好きで、毎日明るく元気に登校している。 ・授業中、落ち着いた態度で臨んでおり、きちんと着席し、内容を理解しようと努力している。 ・時間はかかるが、英語は好きで、コミュニケーション活動に意欲的に取り組んでいる。 ・国語の音読では、大きい声で読むことができる。 【つまずいているところ】 ・板書されたことを、ノートに最後まで書くことが苦手だが、一生懸命書いている。 ・授業内容の理解が難しく、教師の指示通りには教科書が開けなかったりするが、周囲を見て、ついていこうとしている。	○国語の音読において、なるべくつっかえずに自信をもって行うことができる。	○音読の機会を増やし、よくできた点は認めていく。 ○自主学習で漢字練習を継続させ、読める漢字を増やしていく。

実践例１（中学１年・男子）

≪手立て≫

・音読の機会を増やし、よくできた点は認めていく。

・自主学習で漢字練習を継続させ、読める漢字を増やしていく。

≪結　果≫

・自信をもって発表できるようになり、挙手の回数も増えてきた。

・自主学習で漢字練習を継続しようと努力しているが、身に付かない。

≪改　善≫

身に付けてほしい漢字を、あらかじめ書き出し、１日５個ずつ練習させるなど具体的に指示をする。

②　入学支援シート・実践例

記入例

お子さんが楽しく学校生活を送るための
＜入学支援シート＞

お子さんが小学校で集団生活を送るにあたり、学校に伝えたいこと、得意なこと、知ってほしいことをお書きください。　　記入年月日：平成23年　２月10日

氏　名　佐　野　一　郎	平成16年９月　３日生 男・女	幼稚園・保育園等

※学校に伝えたいこと、得意なこと、知ってほしいことがありましたらお書きください。

・隣のお友達と一緒ならば色紙を折ることができます。

・「さ」の発音が「ちゃ」となってしまい心配しています。

・心配なことがあると、指しゃぶりをしてしまいます。

・周りが急いでいても特にあわてず、マイペースです。

・片付けが得意ではありませんが、「机の上のものを全部この箱に入れよう」と具体的に指示をすると片付けることができます。

・急に予定が変わると怒り出してしまうことがありますが、説明すれば納得できます。

下記の項目について確認欄に印を付けて下さい。

【 ◎…よくできる　○…だいたいできる　△…あまりよくできない 】

※記述は、「○○するとできる」という具体的な手立てなどを書いてください。

1．日常生活の中で		確認	特に学校に伝えたいこと
1	好き嫌いなく食べることができる。	○	・励ますと嫌いな物も食べられます。 ・ボタンは大人と一緒に留めています。 ・目で見て分かるように絵や写真で伝えることでスムーズに生活が送れるようになりました。
2	排尿や排便後の始末が自分でできる。	◎	
3	衣服の着脱が一人でできる。	△	
4	自分の名前や年齢が言える。	◎	
5	聞き取りやすい発音で話すことができる。	△	
6	友達や身近な大人と会話のやりとりができる。	○	

2．活動や遊びの中で		確認	特に学校に伝えたいこと
1	困ったとき助けを求めることができる。	△	・虫が大好きです。 ・大きな音はあまりすきではありません。 ・パズル、ブロック、電車ごっこが大好きで、時間を忘れてしまうほどです。 ・友達にやさしく接することができます。 ・はさみやのりなど手先を使った活動が苦手です。（先生が個別に声をかけてくれたり、細かく指示を出してくれたりしたことで活動に取り組めました。）
2	ブランコなどの順番を待つことができる。	△	
3	小集団でのグループ遊びをすることができる。	◎	
4	指示されたことに対して行動ができる。	○	
5	相手の気持ちや場の状況が分かる。	◎	
6	話を最後まで落ち着いて聞くことができる。	○	
7	相手と目を合わせて話をすることができる。	△	
8	急な予定変更があっても受け入れることができる。	△	
9	自己主張が強く、物や人に対しての好き嫌いがある。	(ある) ない	

佐野市教育委員会

実践例１（小学１年・女子）

幼稚園、保育園での友達関係がうまくいっていないまま、入学後また同じ学級となり不安があった。そのことを入学支援シートに書いた。

《手立て》

幼稚園、保育園でＡ児（女子）は、Ｂ児（女子）に命令されたり、他の子と遊ばせないように独占されたりして登校をしぶることがあり大変な時期を過ごした。

保護者は、小学校は単学級なのでまた同じ関係が続くのではないかと不安になった。

一日入学の際、入学支援シートの存在を知る。

保護者は、困っている内容を簡潔に入学支援シートに書いた。

１年生担任は、入学支援シートを読んだ際、入学早々座席順やグループ分けなどを配慮するなどの対応がすぐにできた。

保護者からも、入学支援シートに書いた内容について詳しく相談したいと連絡が入る。

《結果》

担任が把握できていたため、入学後すぐに配慮ができ、Ａ児とＢ児の様子を観察できその都度配慮ができ、Ａ児は楽しく登校できている。

③　小中連携支援シート・実践例

（記入例）

・中学校生活に対する本人の思い・願いと、保護者の考え

本人の思い・願い
「○○を頑張りたい」「こんな中学校生活を送りたい」など、本人の中学校生活への期待を記入してください。 バスケットボール部に入り、県大会に出られるように練習に励みたい。
保護者の考え
「こんな生活が送れるようになってほしい」「こんなことができるようになってほしい」など、中学校生活での希望をお子さんと話し合って記入してください。 勉強と部活との両立を目指してほしい。 将来、どんな仕事に就きたいのか考え、目標に向かって勉強してほしい。

・下記の項目について確認欄に印を付けてください。

◎…よくできる　○…だいたいできる　　△…できるようになってほしい

学習面	1	人前で自分の考えや思いをしっかりと伝えることができる。	◎
	2	書かれた文章を正しく区切り、スムーズに読むことができる。	◎
	3	文章の内容を理解しながら読むことができる。	○
	4	しっかりと読みやすい字を書くことができる。	○
	5	自分の考えや思いを文章に書くことができる。	△
	6	話など、最後まで落ち着いて聞くことができる。	△
	7	先生の質問に的確に答えることができる。	○
	8	学年相当の計算をすることができる。	◎
行動面・対人	9	先生の指示や説明を聞き、内容を理解して行動することができる。	◎
	10	言葉にして自分の気持ちや思いを相手に伝えることができる。	○
	11	きまりやルールを理解し守ることができる。	△
	12	相手の気持ちや場の状況などを考えて、会話や行動ができる。	△
	13	家の手伝いや仕事を最後までやりとげることができる。	◎
	14	身の回りの整理整頓を自分ですることができる。	◎

☆　就学先の中学校に伝えておきたいこと（記入例）

⑴　お子さんのよいところ、がんばっているところ、得意なこと、興味や関心があることなどについて、お書きください。

・犬の散歩を毎日欠かさずしています。
・料理することに興味をもち始め、家族に作ることがあります。
・電車が好きで、時刻表をよく読んでいます。
・水泳が得意で、スイミングスクールに入っています。
・パソコンが好きで熱中しています。

小中連携支援シートの実践例

実践例１（中学１年・男子）

左耳の聴力がほとんど無いという男子生徒。保護者から気を付けてほしいという点が具体的に書かれていた。保護者の記入した生徒指導票や小学校から引き継いだ児童指導票よりも、支援シートの方が詳しく具体的に書かれていた。

《手立て》

新学期が始まる前の職員会議で議題にして、共通理解を図った。

話しかける時には右側から話すように心がけたり、反応の鈍いときには再度発問をし直したりした。

《結　果》

各教職員が事前に共通理解を図っていたため、十分に配慮して指導に当たることができた。本生徒が不便と感じることなく学校生活を送ることができている。

④　中高連携支援シート

中高連携シート（記入例）

氏名　佐野（さの）　太郎（たろう）	性別 男	出身中学名　佐野市立葛生西中学校 入学予定学校名　栃木県立唐沢高等学校

1　お子さんの得意なことやがんばっていることがありましたらお書きください。

- 体を動かすことが好きで、中学校ではサッカー部に所属していました。
- 計算と漢字の書き取りが得意です。
- 手伝いや掃除などの仕事を進んでやることができます。

2　項目欄にある、進学後に必要と思われる配慮事項について、チェック欄に○を付けてください。また、具体的な手立て等がありましたらお書きください。

区分	項　　目	チェック欄	これまでの取組や具体的な手立て
学習面	苦手な科目への意欲		・数学は、少人数での指導を受けていました。 ・周囲の状況に影響を受けやすいので前の席にお願いします。 ・英語のリスニングのテストは、別室で受けていました。
	個別の学習支援	○	
	介助的な支援		
	座席の配慮	○	
	発表や表現する力		
	科目試験の配慮	○	
	教室環境や教室移動の配慮		

	グループ学習への参加		
生活・行動	緊張しやすさ		・集中して活動するのが難しいときに声をかけていただけると、取り組めます。
	言動		
	集中の持続	○	
	こだわり		
	約束や決まりを守ること		

3　学習面で気になっていることや伝えたいことがありましたら、お書きください。

・将来、コンピュータを使った仕事に就きたいと本人が考えていますので、実習等でしっかり学んでほしいと思います。

4　生活・行動・対人面で気になっていることや伝えたいことがありましたら、お書きください。

・人見知りをしやすいので、新しいクラスや友達になじむか心配です。
・急な日程変更があると戸惑って不安定になることがあるので、あらかじめ分かりやすく教えていただけると落ち着いて行動することができます。

佐野市教育委員会

⑤通常の学級における支援の必要性の高い子どもに対する支援の手立て

【例２】授業中、唐突な発言や出歩きなどがあり、落ち着きがない。

集中できる時間が短いのかも••••

→　授業展開や指導形態を工夫したり、活動を細切れにしたりすることにより、変化をもたせ、飽きさせない工夫をしましょう。

外部からの情報に敏感すぎるのかも••••

→　教室環境を整備し、多くの情報が視覚に入らないようにしましょう。

→　学習に集中できるよう、座席を工夫したり、カーテンを利用したりしましょう。

できないとき、どうしたらいいのか分からないのかも••••

→　分からないときのサインや合図を決めておき、対応しましょう。

→　本人がつまずいている時の表情や癖を把握しておき、早めに声をかけるようにしましょう。

⑥　特別支援教育コーディネーターの役割

特別支援教育コーディネーターの仕事とは？

校内における仕事→学校内の連絡・調整など
具体的には…

- **校内委員会の運営：**
  支援の必要な児童生徒の把握とその具体的な支援内容の検討
  「クラスの中で困っている子どものことを相談してみましょう。」
- **個別の指導計画の作成：**
  担任（教科担任）が個別の指導計画を作成することに対する支援
  「個別の指導計画作成で困ったことを相談しましょう。」
- **校内の連絡・調整：**
  個別の支援を行う担当者の決定や教室の確保、担当者との連絡調整
  「誰が・いつ・その子の支援に当たるのかを考えます。」
- **校内研修会等の実施：**
  研修の企画・運営、資料の配付
  「特別支援教育の研修会等について相談してください。」

⑦　校内支援体制について

早期発見・早期支援が大切です

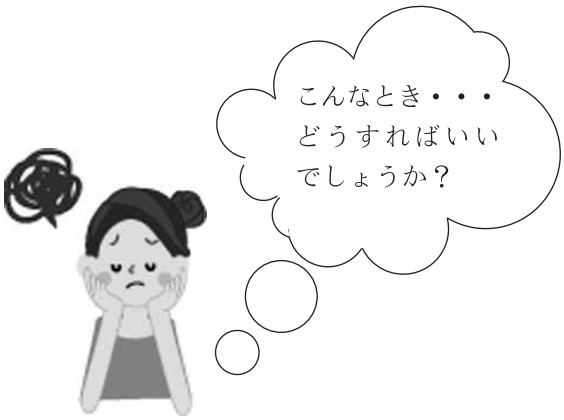
支援が必要な児童生徒がコミュニケーションや人間関係づくりでつまずく場面が見られたら、二次的な障害を防ぐためにも、早い段階での適切な支援が必要です。

誰に相談したらよいか？

まずは、校内の特別支援教育コーディネーターに相談しましょう。学校によっては、ケース会議や教育相談などで特別支援教育コーディネーター、児童指導主任、生徒指導主事、教育相談担当などが連携を図り適切な支援の内容について話し合っていきます。

⑧ 『ナビ』Ｑ＆Ａ

Ｑ＆Ａ



小中連携支援シートについて

Ｑ　保護者への説明の仕方を教えてください。

Ａ　保護者会等を利用して、担任やコーディネーターが直接保護者へ説明するとよいです。説明の一例です。

「小学校として、お子さんのよいところを伝えますが、おうちの方から見たお子さんのよいところや知ってほしいところもぜひ中学校へ伝えるとよいかと思います。中学校の先生も、いろいろあるよいところをさらに伸ばそうとしてくれるはずです。全員ぜひこのシートをご提出ください」

★支援の必要な人が書く、ではなく全員書いて中学校へ引き継ぐように話しましょう。また、説明する前に特別支援ナビのＰ18～24を熟読するとよいと思います。

特別支援コーディネーター

Ｑ　特別支援コーディネーターに任命されました。初めてで何から手をつけるのか分かりません。

Ａ　まず、特別支援ナビＰ36～38を読みましょう。年間を通して仕事はありますが、年度当初に行うものを挙げてみます。

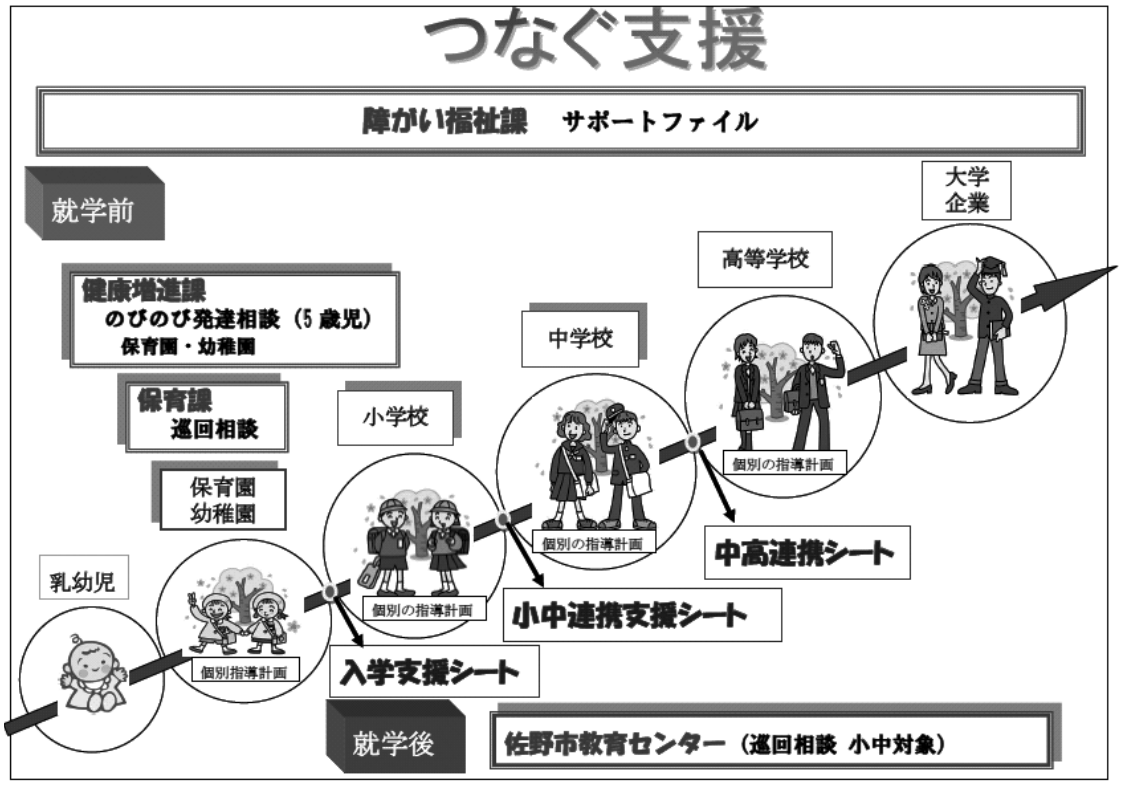
４月→入学支援シート（ナビＰ６参照）に目を通し、新入生の把握をする。全校体制で支援することと、担任で支援することに分けて対応してもらう。その後、取扱いに注意しながら全職員に回覧する。

５月→１年担任に通級指導教室のパンフレットを配布するようお願いする。校内研修を実施し、個別の指導計画を立てる。（活用事例集「特別支援教育コーディネーター」参考）特別支援ナビＰ12を提示しながら説明するとよい。

⑨　特別支援『ナビ』、「特別支援『ナビ』の活用事例集」 活用の啓発

・特別支援教育コーディネーターへの啓発
・児童指導主任・生徒指導主事への啓発
・幼・保・小・中・高の連携の資料として活用
・保護者への説明のための活用
・特別支援教育コーディネーターによる教職員への啓発

⑷　佐野市サポートファイルについて



3　成果と今後の課題

⑴　成　果

・個別の指導計画と連携支援シートの活用からのよりよい支援
・支援の継続、つなぐ支援の実現

⑵　今後の課題

・佐野市の教職員の理解と積極的な活用のための「特別支援『ナビ』」、「特別支援『ナビ』の実践事例集」の活用推進
・個別の指導計画と中高連携支援シートをもとにした、中学校と高等学校の連携
・「移行期」での着実な引継ぎ